

## 組込み技術の豊富な実績をベースに、 多彩なソリューションを展開中

株式会社グレースシステム(本社:神奈川県横浜市)は1991年の設立から、受託開発や自社製品のミドルウェアの提供で、組込みシステム開発に豊富な実績を持つ。技術力を活かし、対象分野にこだわらない製品にもアプローチし、取り扱う製品群も充実度を増している。そんな同社の近況を代表取締役社長・工藤清隆氏に伺った。

代表取締役社長 工藤 清隆氏



### ビジネスの芽が出てきた ユニークな新製品

スマホやスマホや携帯電話をかざすと、音声で流れる2次元バーコードをご存知の方もいるだろう。2cm四方のサイズでも800文字分の情報が記録できるこのコード、もともと視覚障がい者を支援する目的から生まれたものだが、警視庁が採用し案内板への掲載や信号機のボタンに仕込まれているほか、京都の神社仏閣の説明看板、観光ルートの表示板、美術館や博物館での展示物の紹介など、街中や公共施設で活躍中だ。

「Uni-Voice」という製品で、多言語に対応することから、この先東京オリンピックが開催される2020年に向けた情報のユニバーサル環境の整備に期待される。

グレースシステムはこの2次元バーコードを生成するエンコード・デコードライブラリ、音声コードドライバといったソフトウェアを提供する。「軌道に乗るまで時間は要したが、ビジネスのひとつの柱になってきた」と代表取締役社長の工藤清隆氏も期待を寄せる製品だ。

「ほかにも芽が出そうな製品がありま

す」と工藤氏が紹介してくれたのは、海外製で超音波技術を用いた所在検知システム「Sonitor IPS」。海外では主に医療機器の検知に用いられる仕組みで、同社でも病院向けにアプローチを続けてきたものだが、これが運搬船での所在検知として導入されてきたという。

「海外に輸出する運搬船の乗組員の所在検知が目的です。航海途中で不明になることが多く、業界では急務の課題になっているそうです。WiFiによる一般的な所在検知は、鉄で囲まれた船では電波が混乱して使えない。その点、Sonitor IPSは超音波で問題ないため採用されました」。

また、以前から取り揃えている組込み機器用の音声認識エンジンも上向ってきているようだ。「もともと音声データを高音質化してちゃんと認識できるミドルウェアを扱っていたものが、“自社の音声認識エンジンと組み合わせたい”と依頼があって増えていきました。いま機器やシステムを音声でコントロールするというトレンドに乗って、結構動きが出ています」

### 縁を活かした“グレース流”で バリエーションを拡大

1991年に設立されたグレースシステムは、受託開発とミドルウェアを中心とした製品サービス提供でビジネスを展開している。自社開発の組込み機器向けミドルウェアパッケージ「GRAPEWARE」をはじめ、ドライバなどのプリント関連、TCP/IP系レガシープロトコル系など通信ネットワーク系に高い技術力でソリューションを提供する。製品の提供をきっかけに、開発案件の受注につながることも多い。

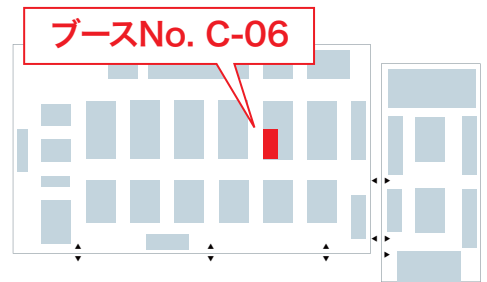
そんな同社を以前から知っている人は、製品分野の幅が広がっている印象を持たれるのではないだろうか。実際、「多種多様なビジネスの芽が出始めてきた」と工藤氏が言うように、新たな分野に向けた展開が活発化してきている。とは言え、それらは自らが製品を探して開拓してきたものではなく、縁から生まれたものだという。「製品を持っている海外の企業が日本で展開しようとしたときに相談を受けたり、ちょっとした出会いがきっかけになっています」と明かす。

会社によっては、これまでと対象分野



## ETWestでデモ展示

ブース(C-06)ではIoT/M2Mソリューション、音声認識ソリューションなど、デモンストレーションを交え展示紹介する。



が違えば断るような話も、同社においてはそれが無い。取り扱うべきか協議はするものの、ほぼ断ることはないそうだ。「まず展示会で紹介してみようか、という感じで話を進めていきます」。取り扱うことを決めたら推進役が必要だが、そこは指名することはなく自薦に任せる。「その案件に思い入れのある社員に手を挙げてもらって決めます。決まったあとは、信用して任せるだけです。こうしたところは“グレープ流”と言えるかもしれません」。

同社は以前から、社員が自ら考えて事業を動かしていく傾向が強く、「Uni-Voice」「Sonitor IPS」は、工藤氏自身が推進してきたもの。「これまでと違う業界にアプローチしていくのは、非常に面白いものです」とは経験からの感想だ。

とは言え、市場的に成長する前段階の助走期間にあたる製品は、ビジネスとして成り立つまで時間を要する。しかも、ビジネスに昇華するとも限らない。なかなか芽が出ないまま数年経過することも珍しくないが、それでもまず中止することはないという。

「やめたらどうかという話になったのは、所在検知システムくらい。医療機器が対象といっても、導入が進む海外と違って日本の病院ではまだ浸透していません。自動認識の技術分野なので、バーコードが普及浸透した年数同様4、5年はおかかるだろうと見ていましたが採用されないままでした。それでも引っ張って行ったら、

運搬船の案件が生まれました」

“やめない”ということでは、既存製品にも当てはまる。通信プロトコルHDLCのLAPBプロトコルのソースコードを提供するGRAPEWAREの「GR-LAPB」はまさにそうで、HDLCが古いプロトコルながら息の長いシステムに用いられていることから、最近でも問い合わせがある超ロングテール製品となっている。

## IoTではシステム構築のソリューション提供に期待

こうして期待が膨らむ製品が増えてきた中、自社開発製品で注目するのがIoT向けシステムソリューション「Clotho(クロト)」。MQTTプロトコルを用いてデータを収集・換するもので数年前に開発した製品だが、単体製品としての販売から体制をリセット、IoT構築のソリューションとして提供を始めたところだ。

「もともとお客様の“どうやってデータをクラウドに上げたらいいのかわからない”という話からつくった製品です。ETをはじめ展示会で紹介すると、反響はあるものの単体ではなかなか売れない。話を聞いていると、お客様のニーズに応えるには、部分ではなくすべてに対応してあげることが必要だとわかってきました」。そこで、サーバ側のIoTプラットフォーム技術を持つ企業と連携するなど、ひとつおりの対応できる体制を整えてきた。「システムのソリューション展開は、これ

までとはまた毛色の違うビジネス。売り方は難しいが、組込みベンダとしてデータを溜めたりクラウドに上げる技術をサポートしながらIoTを実現して行こうと。規模など範囲によって当社だけで対応したりパートナーと連携して進めたり、いろいろ柔軟に展開を考えています」

体制の面では昨年、岐阜事業所を開設したこともトピックのひとつ。ここではITS関係の開発を進めていく。きっかけはこれも縁のある話で、「そうした技術の知見ある人が入社したこと」。工藤氏は、そうした拠点ができればいいなど思っていたそうで、「うまく入り込むと結構仕事がある分野。良いタイミングで開設できました。まだ小さい拠点ですが、東海エリアのお客様のフォローも行なっています」

一気にビジネスが拡大しつつある同社だが、JASAに対してもそこから協業体制が取れる環境であることを望む。「この先、当社だけで対応できない案件も増えてくるでしょう。組込み業界だけにとどまらないかもしれないし、他の業界の会社とコンタクトしたいときなども後押しにつながってくれば」と期待を寄せる。

ET/ETWestは、「有効に活用しています」というアピールの場。ETWest2017では、ここでふれた製品を含む、IoT、音声認識、バーコード/二次元コード、リアルタイムOSといった製品・ソリューションを展示紹介する。ぜひ立ち寄って、同社の技術力を体験していただきたい。